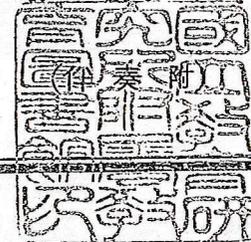


唱歌教科書



◎秋景色

犬童 珠 添

一、吹く風も心地よく 小田の種波立たせ
村人の喜びを 雀近く踊り

鳥遠く歌ふ。

二、山々は紅葉して 綾や錦織れば
山柿も色づきて 眞玉峯に晒し

黄金谷にかざる。

三、茸狩りて歸るさの 人の群れの歌か
一叢の茂りたる森を越えて しらべいと妙に
うれしく 秋のながめ うれしや。

◎我住む里

犬童 珠 添

一、我住む里に 春たちぬれば

百草千草花咲き亂れ

かすめるみ空に 小鳥もうたふ

うき世に遠き山里嬉し。

二、我住む里に 秋立ちぬれば

葉末の露に蟲啼き交し

澄みゆく月かげ心を洗ふ

うき事知らぬ山里嬉し

◎里の秋

八波 明 吉

秋風 さらさらさら

門田の稲葉を吹く

鳴るよ 鳴子が けたたましく

案山子も 驚き顔。

◎村の祭

一、黄金の種波森によせて

浮き立つ村の祭日

里にひびく笛や太鼓

ぞめきぞめく賑ひ。

二、どどろく太鼓浦曲わたり

ふきなす笛のゆかしや

けふの祭うたへ祝へ

こがねみのるよき日を。

三、野山にごよむ宮の相撲

花火の音もいさまし

けふの祭うたへ祝へ

こがねみのるよき日を。

◎歳暮

犬童 珠 添

一、あはれことも夢さくらし

をしむ日数と早やもなりぬ。

二、過ぎしひと年かへり見れば

成し、事ごとあともなくて。

三、朽ちし軒ばに風すさび

老いの頭に雪ぞつもる。

◎獵夫の歌

犬童 珠 添

一、分け行く山路 攀づる岩根

猿のごとき足の運び

ララ……………

高き梢に鳥は歌ふ。

二、梢の鳥よ安く歌へ

望むは谷に住める獸類

ララ……………

勇める犬の叫び聞ゆ。

三、勇める犬よ高く叫べ

手に執る銃の先きもふるふ

ララ……………

出づるは何か来るは何か。

◎明け行く空

犬童 珠 添

一、明け行く東のみ空をそめて

今しも昇れる旭を仰げ

照る日の光りを其の身に浴びてぞ

此世の萬物生きてし榮ゆ。

二、眩ゆきみ光り天地そめて

今しものぼれる旭を仰げ

照る日の恵を其の身に浴びてぞ

此世の萬物生きてし榮ゆ。

◎若き日

犬童 珠 添

一、花を見れば思ふ 過ぎし若き其日

月を見れば思ふ 睦びし昔の友

色香はかへせず その花咲けども

光りは變らず 月かげ澄めども。

二、遊びなれし小山 心ある汝も

共に浴びし小川 忍ぶか汝も昔

かの岡その谷 ながめは變らず

かの橋此の森 姿はそのまゝ。

◎雪の夜

犬童 珠 添

雨戸をたたく吹雪の音

燈火中に圍爐裏圍む

父は語る昔話 子等は聞けり耳を立て、

冬を知らぬ家の内に 昔語りの花を咲く。

門に近かくものひびき

松の枝や折れつらん

屋根の雪や落ちつらん。

ふしぎに入りし子等はねむり

あたり静かに夜はふけぬ

松吹く嵐 今はやみて

窓うつ風の音も絶えぬ。

◎友を送る

八波 明 吉

一、行くか 友よ 汝ひとり

我等を置いて 遙けき旅へ

行くか 友よ 汝ひとり

汝が行く先に 幸こそ待てれ

二、行けや 友よ いざさらば

行けや 友よ いざさらば

◎冬のあした

犬童 珠 添

一、しとねを離れて雨戸を纏れば

昭和三年四月十日印刷
昭和三年四月十三日發行

定價金壹圓參拾錢

不許
複製

編纂者

若狹萬次郎

發行兼
印刷者

東京市小石川區八千代町四十二番地
若狹萬次郎

東京市小石川區八千代町四十二番地

發行所

交響社出版部